

# さわやかに たからかに とこしえに

秋田県立横手清陵学院中学校・高等学校 校長室だより第4号  
2020年7月22日(水)発行 文責 信田 正之

## 人生に無駄はない

7月に入って、ようやく部活動の大会がスタートしました。6月までは練習すらまともにできなかったことを考えれば、大会に参加できることは奇跡のようにも思えます。残念ながら、大半の競技は地区大会止まりで、観客数も制限され、しかも主役であるはずの高校3年生の参加が少ないとあって、どうしても物足りなさを感じてしまうのは私だけではないでしょう。しかし、いざ競技が始まると、選手のひたむきな姿には、いつものように感動を覚えます。むしろ、このような状況だからこそ、感動が大きいと言えるでしょう。

さて、高校3年生の中には、進路活動に専念するために大会出場を断念した選手も少なからずいました。吹奏楽部のように、代替大会さえ行われぬ部活動もあります。出場した選手にしても、上位大会がないことに悔しさも残るでしょう。これまで汗水流して努力してきた時間が無駄だったのではないか。そう感じている人も少なからずいるはずですが、でも、本当に無駄だったのでしょうか。

何年前か前に、ある書物の中で「昨日の自分と今日の自分は違う」という記述を読んだことがあります。「からだを構成する細胞は、日々消滅と誕生を繰り返している。一生の間には、からだの多くの部分が新しい細胞に置き換わる。全く違う人間に生まれ変わったと言ってもいい。しかし、それではなぜ、昨日の自分と今日の自分が同一だと感じるのか。それは脳に備わった『記憶』という機能のせいだ」という内容です。私はそれを読んで、人の成長とは正にこのことだと思いました。練習の苦しさも、試合で勝った喜びも、負けた悲しみも、大会に参加できなかった悔しさも、日々のあらゆる経験が自分に影響を及ぼし、その間に新たな細胞が作り出されていく。昨日の自分と今日の自分はどこか違っているのだが、一日の変化は微々たるもので、違いを感じることはできない。しかし、それが積み重なれば、新しい自分に成長できるのだと。そう考えると、人の人生において「無駄」なことは一つもないように思えます。むしろ、苦しんだあとの自分は、これまで以上に大きく生まれ変わっていると言えるのではないのでしょうか。

思い返せば、私にも一見無駄だと思っていたことが、実は無駄でなかったという記憶がたくさんあります。小学生のころ、夏休みになるとカブトムシやクワガタを捕るために木登りをすることが日課でしたが、気づかぬうちに体力やバランス感覚が養われ、高校時代はサッカー部の選手として、教員になってからは野球部の監督として大いに役立ちました。子どものころ、勉強よりも魚採りや昆虫採集、読書が好きだったことや、高校時代に死ぬほど眠かった世界史の授業、大学時代に始めたギター。それらを通して得た知識やスキル、体力が今、自分の人生に大きな影響を及ぼしていると実感します。

高校3年生はいよいよ進路というステージに向かって歩き始めます。これまで身に付けてきた成長の証を総動員して、大きな目標にチャレンジしてほしい。「人生に無駄はない」。この言葉をすべての高校3年生に贈ります。結果を恐れず、勇気を持って前に突き進んでください。

追伸

中学生、高校生にとって、夏は部活動の大会シーズン。しかし、一部を除いて、多くの選手たちは全国大会を前に涙を飲みます。特に3年生は、そこで中学校、高校の部活動を引退する「最後の夏」でもあります。確かに、負けたときの悔しさは計り知れないものがあるでしょう。しかし、3年間、情熱を傾けて努力してきたことには必ず意味がある。部活動を通して、選手たちは何かを学び、成長し、気づかぬうちに新しい自分に生まれ変わっているのだと。そういう思いを何年前かに歌にしてみました。「校長室だより」ではメロディは伝わりませんが、歌詞に込められた意味だけでも感じ取ってください。



あの夏に僕は生まれた

music & words by Shinta

流れ落ちる汗を拭いもしないで  
命燃やした時をここで過ごした

あふれる涙を拭いもできずに  
夢破れた夏がここで終わった

入道雲の上に遙か青い空  
蝉時雨の音が耳に残っていた

僕が自由に空を飛べたとしても  
焼けるようなあの夏にまた帰るだろう

君が僕に生きる意味を教えた  
焼けるようなあの夏に僕は生まれた

西瓜畑の道に突然の雨  
蝉時雨の音がずっと聞こえてた

いつか僕がここから旅立っても  
焼けるようなあの夏をずっと忘れないだろう

君と出会って生きる道を見つけた  
焼けるようなあの夏に僕は生まれた